テッラ・マードレ2008におけるユース・フード・ムーブメント

加納　千佳
（同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程（前期課程））

1．はじめに

筆者は2008年10月23日から10月27日にわたりイタリアのピエモンテ州トリノ市での「テッラ・マードレ（Terra Madre）2008」に、本研究科教員および他の大学院生[1]とともに主催者より招待をうけ参加した[2]。「テッラ・マードレ」とは食のコミュニティの世界大会であり、国際スローフード協会とイタリアの農林水産省、外務省の経済推進局、ピエモンテ州とトリノ市の協力により開催されている。

イタリアで始まったスローフード運動は、経済主義が強要する均一化から地元の食文化を守ってきた。農業も普段の食生活も、食べておいしく、環境にやさしく、社会的に公正ではなくてはならないと提唱している。もともと、世界規模の生産者会議という名の下で行われていたこのイベントは、世界中の生産者はもちろんのこと、料理人、研究者、若者、ボランティアスタッフ等が集まり、交流を深める場として機能している。農業と食に関わる生物多様性を保護するために最も有効であるとして、この国際的な情報・意見交換が行われている。また、今年は「若者」と「音楽」という新しいカテゴリーが加わった。「若者」のカテゴリーが加わったのには、スローフードの国際会議で推進された、若者が食の運動を展開していこうとする「ユース・フード・ムーブメント（Youth Food Movement、以下、YFM）」という新たなネットワークが作られた事が背景にある。本稿では、このYFMに焦点を当て、「テッラ・マードレ2008」について報告する。

2．テッラ・マードレ2008

「テッラ・マードレ」は第１回目の2004年から隔年で行われ、2008年度で第３回目を迎えた。「テッラ・マードレ2004」では、世界中の生産者が自分の役割を確認するため、自分たちの体験を話し合う場であった。2004年の生産者間という枠を越え、2008年度の「テッラ・マードレ2008」では、食に関わる全ての人が、153カ国から8000人以上が来場するに至った。そのうち約6,000人が生産者、1,000人が料理人、400人が教師・研究者、1,000人が若者、さらに250人の音楽家が集まった。この音楽家に関して言及すると、「テッラ・マードレ2008」の中で、音楽は伝統と文化をその中に閉じ込めており、それは日々の労働を祭りの時に結びつける重要な役割と認識されている。実際に、開催期間中あらゆる場所で音楽が流れ、閉会式でも会場がコンサート会場かのような盛り上がりを見せていた。音楽を取り入れることにより、情報を共有するというだけでなく、楽しみを感じることができ、人を引きつける機能を果たしていると考える。

まず、23日には開会式があり、トリノ市長、スローフード協会会長、ピエモンテ州知事からのメッセージの後、若者の代表としてアメリカ・

[1] 今里滋、西村仁志（以上、総合政策科学研究科教員）本多幸子、渡辺雄人、久保友美、西村和代（以上、後期課程）、長澤源一、松木宏美、大石尚子、石川隆平（以上、前期課程）と筆者の11名。

[2] 本研究科教員と院生が招待をうけた経緯および「食科学大学」については西村仁志「イタリア食科学大学の京都研修」『同志社政策科学研究』第10巻（第２号），同志社大学大学院総合政策科学会，2008年を参照されたい。

図１　「Terra Madre 2008」開会式の様子
（西村仁志撮影、2008年10月23日）

マサチューセッツ州在住の高校生Sam Levin氏（Monument Mountain Regional High School）のスピーチがあった。彼は、自分の友人がもっと環境に関心を持ってほしいと思い、学校で有機野菜を栽培するプロジェクトを始めた。その結果、地元の学校の給食で、彼らの作った野菜が使用されるようになったと述べていた。彼は、若い世代でも、情熱があればどんなことでもできるということを訴えかけた。24日には、各国で集まり地域ミーティングが行われた。国ごとで交流を深めると共に、自分の国での問題や、活動の報告が行われた。25日と26日には、AからGの7つに分けられたブースで、テーマごとにワークショップが行われた。そして、27日に閉会式というプログラムであった。隣接された建物では、「サローネ・デル・グスト（Salone del Gusto）」という食の祭典が行われていた。ここでは、地域ごとの産品を味見し、購入する事ができる。この祭典は1996年から開催されており、「テッラ・マードレ」が開催されてからも平行して隔年で行われている。

３．ユース・フード・ムーブメント

YFMは2007年にメキシコで開かれた第５回スローフード国際大会において食科学大学（Università degli Studi di Scienze Gastronomiche）の学生により提案された。これは、若い生産者、学生、料理人、消費者などの国際的ネットワークを作り上げ、お互いの結びつきを強くすることに焦点を当てた、若者の食と農の運動である。

10月26日には新しいネットワークとして「若者のネットワーク」と題されたワークショップが行われた。ワークショップには、世界中の若者が参加し、実際に行っている活動の報告が行われた。食科学大学は、「パンゲア（Pangea）」という活動を、映像で流し報告していた。これは、世界中の生産者のもとに若者が数週間滞在し、生産過程を体験するものである。あらゆる地域で行うことにより、生産者と若者との交流を図るだけでなく、伝統的な知識を若者に伝えることを目的としている。この活動により、知恵という財産を失われないようにすることができるとも主張している。食や農の活動だけでなく、若者による環境問題に関する活動も報告された。エストニアでは、大量のごみが国内各地の森の中に不法投棄されているにも関わらず、行政も市民も無関心という状況があったという。そこで、まず問題だとわかってもらえるようゴミのマッピングを行った。単に言葉でなく、イメージとして市民に訴えたのである。それか

図２　ワークショップ「若者のネットワーク」の様子
（西村仁志撮影、2008年10月26日）

ら広く参加を求め「The biggest clean-up action in Estonia」というイベントを開催。その結果、5,000人でごみ拾いをし、５時間で１万トンのごみを回収することができたという報告があった。

YFMが提案されてから初めてのテッラ・マードレでも、この運動に対する注目度は高い。若者のワークショップの会場には、他のワークショップにはない熱気と多くの人が集まった。若者はもちろんであるが、報道陣や教員、また、スローフード協会会長であるカルロ・ペトリーニも会場に訪れたことから、この運動が注目されている事が伺える。カルロ･ペトリーニは､「体験する事が必要」「若者のネットワークを機能させてほしい」「全ての物を映像に収めていくことで、情報の百科事典になる」と若者に訴えかけた。

４．おわりに

イタリアのスローフードの企画の中に「味わいの週間」というものがある。これは、子どもたちに試食と料理をさせるコースと、最高級レストランが25歳以下の若者に格安メニューを提供するコースとがある。これは、若者を対象にし、大人達が企画をした活動である。YFMは、若者を対象にし、企画も若者がするといった自発的な運動である。世界規模で食に関する問題が浮上する中、この若者の自発的な運動が、この先の社会にどのように関わっていくのか注目していく必要がある。日本でも、この影響を受け、実際に動き始めている若者も見られるようになった。しかし2005年に食育基本法が制定され、食に関する活動は多く行われているが、子どもを対象としたものがほとんどであり、若者を対象としたものや若者が自発的に行っている活動は未だ多いとはいえない。筆者の世代の子ども時代には、現在のように盛んに食育活動が行われていなかった。これからの社会を担う若者が、食について共に学び、また次の世代へと伝えていくことが、現在の食環境をより良くしていくために必要ではないだろうか。

「テッラ・マードレ2008」に参加し、食を通じて新たな出会いと知識を得る事ができた。このように「食」というキーワードで、人間関係を豊かに築くことができる。筆者自身もこの「食」というキーワードを掲げ、YFMの活動に注目していくとともに、今回参加した「テッラ・マードレ2008」で得た知見やネットワークを、今後の研究活動に役立てたいと考えている。

参考文献

カルロ・ペトリーニ『イタリア流・もっと「食」を愉しむ術　スローフード・バイブル』日本放送出版協会，2004年

西村仁志「イタリア食科学大学の京都研修」『同志社政策科学研究』第10巻（第２号），同志社大学大学院総合政策科学会，2008年

参考ウェブサイト：（2009年５月７日閲覧）

TerraMadre Rete delle comunità del cibo
http://www.terramadre.info/welcome.lasso
Youth Food Movement
http://youthfoodmovement.org/